

KOBE university



STYLE

神戸大学 2012 AUTUMN Vol.18

Contents

特集1	神戸大学経営学研究科 MBAプログラム	1
	三品和広教授インタビュー	2
	神戸大学MBAの授業紹介	6
	経験を生かして-OB・OG寄稿	7
	グローバルリーダー人材を育成する SESAMI Program	8
特集2	登録有形文化財になった武道場	
	武道場の修復に寄せて	10
	神戸大学武道場の歩み	12
	剣道部、柔道部、空手道部	13
	キャンパスライフ サークル紹介	
	硬式野球部、山美鼓、MOMO、神大モダン・ドンチキ	14
	同窓会・育友会・神戸大学基金	16
	保健管理センター だより	18
	歴史のひとこま	20
	お知らせ	21

特集1

神戸大学経営学研究科 MBAプログラム

欧米では、「経営のプロフェッショナル」を養成する経営大学院(ビジネススクール)が早くから設立されてきました。この経営大学院を修了すると授与される学位がMaster of Business Administration(MBA)です。今や世界では、グローバル市場で活躍するためにMBAが必須の資格となりつつあります。現在、わが国においても、各大学でMBAコースが設置され、多くのビジネスパーソンが学ぶようになりました。

神戸大学大学院経営学研究科は、平成元年に、国内他大学に先駆け、社会人を対象としたMBAプログラムを立ち上げています。それ以来、各界に多くの優秀な修了生を輩出してきました。われわれは、MBAプログラムを開始するにあたって、安易に欧米の教育方法を模倣するのではなく、わが国の産業界で求められている問題を検討する「プロジェクト方式」による教育方法を実践しています。

「プロジェクト方式」とは、産業界からの要望の高い問題に含まれる解決すべき複数の課題について、それぞれ5~6名の社会人学生からなるプロジェクトチームを編成し、学生相互間および教授陣・学生間でお互いに知恵を出し合いながら、共同研究により解決策を探る教育システムをいいます。本研究科では、1プロジェクトチームごとに、指導教授陣を中心とするきめの細かい教育研究体制を作りあげてきており、この教育方法は世界的に例をみないユニークなものとして、社会より高く評価されています。

本特集では、長年プロジェクト方式による授業を担当してきた三品和広教授のインタビューとともに、OB・OGの声を紹介し、神戸大学MBAにおいてどのような教育が実施されているかを紹介します。

最後に、本研究科が来年4月に立ち上げる新しい博士課程「SESAMI(セサミ)プログラム」についてもお知らせします。

経営のプロフェッショナルを養成するビジネススクール





三品 和広教授

インタビュー

PROFILE

1982(S57)年 一橋大学商学部卒業
1984(S59)年 一橋大学大学院商学研究科修士課程修了
1989(H元)年 ハーバード大学文理大学院博士課程修了
1989(H元)年 ハーバード大学ビジネススクール助教授
1995(H7)年 北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術調査センター助教授
1997(H9)年 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科助教授
2002(H14)年 神戸大学大学院経営学研究科助教授
2004(H16)年 神戸大学大学院経営学研究科教授
【専攻】経営戦略・経営者論 【研究テーマ】経営者と経営戦略

ビジネススクールの過去・現在・未来と神戸大学MBAプログラム

MBAはなぜ出来たのか

○ビジネススクール、いわゆるMBA(Master of Business Administration)はどのような経緯で生まれたのかお聞かせください。

MBAの起源はアメリカにありまして、大体20世紀の初頭に誕生しています。私の前々任校にあたるハーバード大学では1908年にMBAが創設されています。なぜその時期にMBAというプログラムが生まれたのかというと、そのころの時代の新規課題に関係しているのです。

アメリカの19世紀は、創業者、創業家の人名が社名につくような大企業がどんどん誕生して、19世紀の間は創業した人達が実際に経営にあたっているという現実がありました。例えばプロクター・アンド・ギャンブルという会社がありますが、この社名はプロクターさんとギャンブルさん、またはカーネギー・スチール、これはアンドリュー・カーネギーさんですね。またはタイヤでいうとグッドイヤーというのがありますが、これはチャールズ・グッドイヤーさんなんですね。

ところが、どんどん代替わりが続く中で、20世紀に入ると創業経営者もしくは2代目の同族の血が絶えてきて、そういう人達が自ら経営をしなくなります。それによって、初めて近代的な大企業にサラリーマン経営者が誕生するという時代を迎えました。これが容易ならざる問題を生み出したわけです。自分で会社を創った創業経営者は、日本で言えば松下幸之助さんとか本田宗一郎さんとか、または井深大さん、盛田昭夫さんのような人々がいますが、こういう人達は自分で

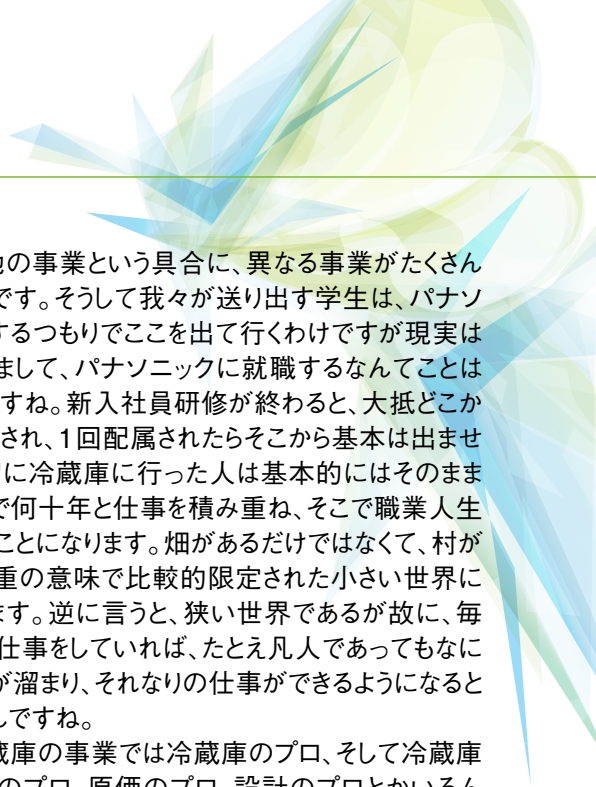
会社を創ったので大義名分があって、「こうするぞ」と言えば社員は納得するという図式があったわけです。

しかし、自分で会社を創ったわけではない人が経営判断として「こうするぞ」と言っても何の大義名分もない。よって社員はなかなかついてこないという状態になり、経営の難易度は飛躍的に上がりました。そういう時代の到来を予期して、創業経営者でもないのに大企業を経営できる人を養成しなければならないという発想にアメリカは到ったわけです。そしてその具体的な手段として、ビジネススクールを設立し、MBAというプログラムを創り、そこで未来のサラリーマン経営者を養成するということになりました。

○なるほど。では、日本の事情はどのようなのでしょうか。

日本は20世紀に入ってから、大企業の設立ラッシュが始まっています。これはアメリカに比べると、業種にもよりますが、半世紀くらい遅れた勘定になります。そして松下幸之助さんが1989年にお亡くなりになったというのは遅い方で、本田宗一郎さんたちが1970年代に引退し、ちょうどその頃に創業経営者が大企業の経営をしなくなるという時代が日本にも来るわけですね。それに伴う困難を、日本では誰も予期しなくて、なんとかなるんだと高をくくっていたところがあると思います。

ところがそれがなんとかなったのは、高度成長期という非常に恵まれた条件の下においてであって、石油ショックを経て、円高を経て、経営環境が悪くなると、いろいろな難しさが露呈し始めて、業績が悪くなり始めます。そこで慌てふため



いて、日本でも経営者は養成しないと生まれないと認識されるようになりました。

日本では1990年代にソニー・ユニバーシティのように、大企業が自ら社内大学を創るという流れが芽生えたんですが、それは大体50歳前後の人を対象とするわけですね。それでは手遅れだということで、意識の高い若い30代の人々が「自分も今のうちに自分を鍛えないと駄目だ」ということで動き始めました。その受け皿になったのがグロービスであり、また大学が設立したMBAプログラムということになるわけです。

○それは1990年くらいからでしょうか。

90年代後半からですね。バブルの崩壊に伴って、最終的に誰もが苦しいと実感しました。そこから先、社内大学、またはビジネススクールの設立が日本でも始まりました。経営が難しくなってきた時にビジネススクールが生まれたということです。日米での大きな違いは、アメリカは困難を予期して先手を打ったのに対して、日本は困難に対して後手に回ったということですね。

企業内で経営者を育てるには限界がある

○会社の中で経営者を育てるには限界がある、ということですね。

はい。大きな限界があります。それは会社の中で社員は雇用保証と引き換えに人事権を会社に差し出すわけです。辞令1枚でどのような仕事をするか、会社に決められてしまいます。極端なことをいうと、明日どこでどんな仕事をするか、サラリーマンはわからない存在なんです。何をやるかは社命で決まる。それが決まったら、粛々と成果を出すというのが勤め人の仕事です。その上で実務をこなしていく。大体皆さんが辞令をもらって「3年くらいかな」と読めるわけですね。その与えられた3年という期間の中で、結果を出していくということにかけてはプロになっていきます。

ところが経営において一番難しいのは、「何をしたら報われるのか」「何に挑戦するんだ」というあたりを決めるところなんです。これはサラリーマンは一切自分で決めない、そういう宿命にある部分です。分かりやすく言うと、経営は「what」を決めるという仕事で、実務は「how」を考えると仕事になります。仕事を一所懸命やるだけだと「how」の力はどんどん積み重ねられていくのですが、whatに対する鍛錬というのは基本的には何もなされないということだと思います。

○MBAでは、会社では出来ないことをどのように教育しているのでしょうか。

MBA最大の利点は、視野の幅です。会社の実務の中では通常、効率を重視するが故に、人をどこかの畑に配属すると、そこから動かさない傾向にあります。ある畑(分野)の中で、細かく定期異動をしていくということです。具体的には「経理畑」「人事畑」「生産技術畑」と色々な畑があるわけですが、特定の畑の中で人は専門家として育てていくことになります。

さらにもう1つ、大企業には例えばパナソニックでは洗濯機の事業、冷蔵庫の事業または半導体の事業、テレビの事

業、または電池の事業という具合に、異なる事業がたくさん同居するわけです。そうして我々が送り出す学生は、パナソニックに就職するつもりでここを出て行くわけですが現実はずいぶん違っていて、パナソニックに就職するなんてことはありえないですね。新入社員研修が終わると、大抵どこかの事業に配属され、1回配属されたらそこから基本は出ません。よって最初に冷蔵庫に行った人は基本的にはそのままずっと冷蔵庫で何十年と仕事を積み重ね、そこで職業人生を終えるということになります。畑があるだけではなく、村があるんです。2重の意味で比較的限定された小さい世界に閉じ込められます。逆に言うと、狭い世界であるが故に、毎日会社へ来て仕事をしていれば、たとえ凡人であってもなにがしかの知見が溜まり、それなりの仕事ができるようになるという仕組みなんです。

例えば、冷蔵庫の事業では冷蔵庫のプロ、そして冷蔵庫の中でも経理のプロ、原価のプロ、設計のプロとかいろんな人達ができますから、そういう人達がチームで経営をすれば冷蔵庫事業は何とかなるんです。ところが、そういう村の寄せ集めであるところのパナソニック全体の経営の舵取りを誰かがしないとダメです。それを特定の村で育った人ができるのかという問題がここで持ち上がるわけですが、それは無理です。結局、見たこともない、知らない畑や村の経営というのは、やりようがないんですね。経験主義に頼っています。

MBAには、村がない。畑がない。MBAの学生が会社に帰ると「この畑、この村の所属です」という現実があっても、一旦教室に入ってくると、我々は村も畑も識別しません。無視します。そして、誰がどこから来ても全ての畑について精通して下さい、また世の中に存在するいろいろな村、つまりいろいろなタイプのビジネスがどうなっているのか、もちろん広く浅くになりますけれども、そこに好奇心を養い、覗いてみて下さいと、そういうタイプの課題を出していきます。それによって会社の中では絶対に培えない広い視野を養います。「展望をひらく」それがMBAの最大の機能だと思います。

プロジェクト方式で意思決定力を養う

○高い視点でビジネスを捉えた後、経営者ですと、何かを決めないといけないということになりますよね。MBAでは、そうした力をどのようにトレーニングしているのか教えてください。

神戸大学が得意とするプロジェクト方式が該当します。普通MBAというのは長く座って受ける講義が中心で、それをするとなりが身につきます。ただ、それだけでは「耳年増」のようになってしまいかねないですね。

神戸大学は学生を少人数のグループに分けて、そのグループで1つのテーマを共有して、実際に自分達の見解をまとめて発表するという機会を設けます。これを我々は「プロジェクト方式」と呼んでいるんですけども、実際にプロジェクトを設定して、そこにはかなりのエネルギーを注ぎ込みます。しかもこのプロジェクトをグループで実行するという設定を導入しています。

それによって、まずは見知らぬ人達と組んで課題をこなしていかなければならない。会社には権限関係がありますから、

上司がこうだと決めたら下位の人は従うというのが基本です。ところが、ここのMBAプログラムは20代の人から50代の人まで集まって、そこに一切権限関係がありません。よって自分の会社における立場とか、年齢とかは基本的になんか捨てて、純粹に自分の考えていること、または自分が相手に伝えることにメリットがあるかどうかで、人が動いてくれるかどうかが決まるという世界が出現します。そういう中で実際に人を動かすのは簡単ではありません。言うなれば「説得」という訓練を実地でやるわけですね。

さらに、このプロジェクトには帰結が伴います。会社の場合、サラリーマンが最終的に責任を取り切るとするのは難しいですね。「責任は俺が持つ。だからお前は思い切ってやれ」と上司が言うけれども、実は責任の取りようなんかありません。それがまずい判断でも結局口は会社が吸収してくれるわけですね。そういう意味で、会社の中にいると、自分の決断の帰結をフルに自分で受け止めるという感性が発達しにくくなります。しかし、このプロジェクトでは自分達の下した判断が悪ければ、悪い結果に直結します。そしてそれが自分達の成績に反映されます。そういう仕掛けになっていますから、ある意味、自分で責任を取って判断する、決断するという機会がたくさんそこに生じます。

○プロジェクト方式というのは世界的に見て、どのように位置づけられますか。

MBAの中では比較的めずらしいと思います。なぜかというと、世界一般では経営をするというのは、基本的に個人の仕事であるという認識があって、最終的には1人で決めなければいけない。ハーバードなんかは典型例ですけれども、個人と個人を競わせるという極めて競争的な環境の中で、「競い合う」ことによって人間力を身につけるという設計になっています。

それに対して、神戸大学ではあくまでもグループ。自分1人で決める、または自分1人でやるのは簡単ですが、そうではなく、協力者がいて、彼らを説得しないと何も動かないという状況を作ります。これが1つの日本の知恵なんじゃないかな。

○グループ単位で動いていくということは、トレーニングの仕方としてはむしろ会社の組織の状況に近いと考えられますか。

まさにその通りで、私がアメリカのMBAプログラムにいた1990年代に、アメリカではもっとチームワークの要素を入れなければいけないということが言われていました。あまりに

も個人戦になっていて、実際の仕事というのはチームである場面が多いので、チームを動かさない人間がMBAと言っても駄目であるという認識が広がり、教育改革が始まりました。そういう意味で、日本の方が進んでいるという側面もあります。ただプロジェクト方式にも課題があって、個人の覚悟をどこまで高めることができるか、そこに勝負所があります。

MBAを使いこなせなかった日本企業

○話は少し変わりますが、MBAを持っている人は、どの会社でも活躍できるのでしょうか。

MBAには「ポータブル」という誤解が蔓延しています。それはどういうことかという「MBAで訓練された人間というのはどこの業界に行っても、またはどこの会社に行ってもうまくいくんだ」という考え方ですが、これは幻想です。MBAからポータビリティは生まれません。

日本でMBAに社員を留学させることが1980年代に流行りました。1980年代から国際人という言葉が日本で叫ばれるようになって、国際的に活躍出来る社員が必要だという認識が高まりました。そして円が高くなって、MBAに留学させる費用が昔ほど高くなかったという事情の上で、留学制度が充実していくわけですね。ただ、その当時の日本企業は実際にMBAがどういうものかよく知りませんでした。そして学位を取って帰ってきた社員の使い方が分かっていなかった。それによってMBAホルダーの多くが辞めてしまうという状況に陥ります。つまり留学制度は成功しなかったということです。

MBAに社員を派遣するということは、結局会社を2つに割るということなんです。9割以上を占める実務人材と1割の経営人材。そして、経営人材を養成するためのMBAということです。日本はその区別を導入しないまま社員をMBAプログラムに派遣してしまったので、MBA取得者の帰る場所がないのは当然ですよ。それでうまくいかなかったということです。

ただし実際に、今日本で脚光を浴びている若い経営者を見ると、例えば楽天の三木谷君、グロービスの堀君、ローソンの新浪君など皆、私がアメリカでMBAの教壇に立っていた時にそこを通過していった学生達です。アメリカでMBAの教育を受けた日本人は異様に高い確率で起業に成功しています。また、自ら会社を創らなくても、コンサルタントとして一匹狼で活躍しているという人材がたくさんいます。そういう人々が日本で例えばウィルコムなど、傾いた会社の再建に関与したりしています。そうした事例を見ると、日本人にとっても、「場」さえちゃんと与えれば、MBA教育は活きるといういいかと思えます。

神戸大学MBAの特徴

○一般の人の中には「MBAを持っていると会社で出世できるのか」という疑問を持っている人もいます。日本においてMBAを持っている価値や、キャリア上のメリットについてお伺いしたいのですが。

神戸大学は1989年からMBAを始めているのですが、そろそろこのMBAプログラムを通過した人で、執行役員に



なるという人達が出始めています。もともと意欲的な人だったからなのか、また神戸のMBAで受けた教育が少なからず役に立っているのか、まだ分かりませんが、会社の中でかなり評価される人材が出てきています。現在は、草の根的に、ボトムアップでMBAを取得した人材の価値が認識されつつあると思うんですね。そういう人の中から、本当に会社の舵取りを任せられる社長が出て、そして一例だけではなく何例も成功事例が出てくると「やっぱりこれは効くんだな」ということで、評価が定まってくるかと思います。そうすると、初めて実務階層と経営人材はやはり分けて考えるという時代が日本にも訪れるのではないかと考えています。

○ここで、神戸大学のMBAについて少し詳しく聞きたいと思います。神大のMBAの授業はグループ制で行うというのですが、どのような形で評価されるのでしょうか。

プロジェクト方式の教育には3つのステージがありますが、私は、第1弾のケースプロジェクトを担当しています。ここでは成績の半分を、チームの発表に対して審査員がつけた評価をそのまま反映させます。そして残り半分は発表の1週間後に個人で提出してもらった内省レポートを採点して評価を決めます。

まず、「自分はこっちだ」と主張をしたのにそれをチームに受け入れられず、チームが結局こっちにあって評価が悪かったというケースも連帯責任です。「それはあなたも悪いです」ということです。またよくあるのですが、お互いの主張が噛み合わず、ほとんど空中分解の状態で何とか最終発表を形だけつけたというチームもあります。こういうところは大体評価が悪くて、「内部に亀裂が走ったままそれを止めるチャンスはあなたにあったのだから責任を取って下さい」という評価を突きつけます。

そして、内省レポートを個人で提出する時、「一体自分達のチームは何が機能したのか、しなかったのか、なぜなのか、プロジェクト全体のプロセスを振り返った時、どこでどうすべきだったのかを考えて書いて下さい」と指導しています。だから、チームのメンバーそれぞれ個別に書いたレポートを突き合わせると、大体そのチームに何が起こったのかわかります。その中で特に動きが悪かった、成熟が足りないと思われる人については、警告の意味でペナルティを与えます。

○シビアな世界ですね。そうしたグループワークやチームプロジェクトによる学習が、サラリーマン経営者の育成とどのようにつながるか教えてください。

13チームが最終的に発表会の中でコンペになるんですけど、そこで優秀な成績を収めようと思うと、他のチームと同じ大きなテーマに対して、皆で簡単に合意に達するような、水が低きに流れるように低いところで合意をすると、大体他のチームに埋没してしまう、大差ないところへ行ってしまうんですね。そこで突出した結果を出そうとすると、どこかで非凡な発想を入れられないといけないわけです。しかし、非凡な発想には、抵抗が出ます。そういう非凡な発想を活かさないと駄目だというのは、実は企業経営も同じなんです。非凡な発想をチームを通してしまうためには「技」が必要になります。これを実践の場でやってみて下さい、というのがプロジェクト方式です。そこがうまくいかなかったチームは、思い切り

痛い目に遭わせます。

その代わり3つのステージがあるので、第1ステージで失敗して「そうか、これが足りなかったのか」「難しいなあ、次のチャンスはこうしよう」と思ったら、第2ステージでそれを活かして、もう一回やり直せるという仕組みになっています。そういった繰り返しによって、何かしら身につくものがあれば願っています。

○3つのステージというのは？

ケースプロジェクト、テーマプロジェクト、そして修士論文です。

○ケースプロジェクトとテーマプロジェクトについてはわかりませんが、なぜ最後に修士論文があるのでしょうか。

我々のMBAプログラムの受講者の平均年齢は37歳くらいなんです。会社の中で、管理職になるかならないかという時期です。その頃から日本の企業を見ていると、社命に良く従って「how」が上手だという人は重宝されてトントンと上がるんですが、たいてい、そういう人達は役員になれません。最終的に役員に選任されたり、社長に指名される人々というのは、管理職になるぞという時点から持論を持っています。「自分ならこうする」「自分はこうだと思ふ。こうしたいんだ」という考えがあります。そして、指名する側からしてみると、そういう何かしら強い意志を持った人間じゃないと最終的には役員は務まらないということが分かっているの、ただ上司の指示、または社命に良く従うという人では駄目だということになるわけですね。

神戸大学の修士論文というのは、「自分の意志を固めなさい」ということなんです。これは思いつきでは駄目だし、37歳の人であれば、その後だいたい20年ちょっと職業人生があるわけですけども、その20年の中で「やっぱり、やめた」とか「ダメだ、これは」というテーマを設定されては困るわけですね。1年以上かけて考えに考え抜いた上で「自分がこの会社の中で成し遂げたい仕事は何か」「それをどのように成し遂げるのか」それを考えてくれ、というのが修士論文です。そして、それを簡単に翻さないために文章にして証拠にして残していきなさいということなんです。

○先生のお話を聞いて、MBAとは何か、現在どこに向かっているのか、神戸大学のMBAプログラムの特徴がよくわかりました。お忙しい中、お時間いただきましてありがとうございました。





写真(左から)著本史朗氏、木村亮氏、桜田圭子氏(宝島社)、都良太郎氏

神戸大学MBAの授業紹介 プロジェクト研究を通じた学び

2012年松尾睦ゼミ修了
木村亮(朝日放送勤務)

ケースプロジェクト研究での4カ月間は、 まさに苦闘の日々でした——

神戸大学MBAの特徴として、リサーチ・ベースド・エデュケーションを実践する場としての、ケースプロジェクトとテーマプロジェクトという2つのプロジェクト研究が設定されている点が挙げられます。中でもケースプロジェクトは、MBA入学初日にいきなりスタートするプロジェクトで、4カ月に渡って、他の授業と並行しながら研究を行い、与えられたテーマに従ったケース企業を選定し、取材を行い発表するというものです。

初めて顔を合わせる同級生と、すぐにチームを形成して研究を進めるという事は、簡単なことではありません。お互いの性格や、勤務先の業務などについても理解を深めながら、効率よくチームを形成し、また同時にチームのメンバーが等しくケースに没頭出来るよう、常に互いをモチベートし続ける必要があります。議論の過程で意見が衝突することもあります。その為、ときにはお酒の力も借りて、チームのメンバー同士が本音で語り合いながら、インパクトのある発表へ向けて、チームの方向性を定めていきます。

フィールドに出て、直接企業へ取材を行うという点もプロジェクト研究の特徴です。テーマに合致する企業を見つけ、インタビューを行いながら「実際に足でかせいだ情報」をもとにして研究発表をまとめます。対象企業へ直接取材を行うことで得られた気持ちは、新たな視点として自身に深く浸透していきます。通常の授業で得られる知識とはまたひと味違う、特別な重みを感じさせてくれるのです。

わたしが所属したチーム芦屋の、ケースプロジェクト研究での4カ月間は、まさに苦闘の日々でした。三品教授から我々に与えられたテーマはDisplacement(ディスプレイスメント)。一見して理解することが容易ではないテーマにどのチームも苦戦したようですが、チーム芦屋は特に、対象企業の決定に至るプロセスにおいて苦悩し続けました。なにしろケース企業がまったく決まらないのです。毎週授業後はもちろん、平日にも度々議論を重ねました。ようやくケース対象として、宝島社の女性向け雑誌SWEET(スウィート)を中心とした、出版業界におけるDisplacementを取り上げる事が決まったのは、最終発表を1カ月後に控えた7月初旬のことです。もちろん全チーム中で最後の決定でした。

最終発表までの限られた時間の中で、いかに発表内容

を充実させるかという点でも苦労しました。しかしながらようやくケースが決まったという感慨から、このまま最後まで突っ走ろうという勢いがチームに生まれ、インタビューも短時間で効率よく行うことが出来ました。最終的に我々チーム芦屋は、金賞の受賞を得られる事となりましたが、最後まで諦めずに、泥くさく粘り続けた結果が、金賞受賞に繋がったのではないかと考えます。

こうしたプロジェクト研究を通じて、神戸大学MBAの学生は、研究において、これまで以上に深い問題意識を持って物事を捉える必要があることを学びます。これはMBA入学前には持ちえない、あらたな視点であり、個人の学習だけでは得られないであろう気づきです。チームのメンバーと徹底的に議論し、協働作業を行うプロジェクト研究だからこそ得られる財産でもあります。

こうした時間のマネジメントも含めて MBAなのだと理解しました——

神戸大学MBAの日々は大変充実していて、プロジェクト研究に限らず、どの授業も濃密であり、クラスメイトとの議論も常に刺激に満ち溢れています。こうした神戸大学MBA独自のプログラムを経験することによって、MBAの学生は、得られた知識をより深く理解し、持論として、自分自身にしっかりと根付かせることが出来るのではないかと考えています。

授業の課題や事前準備などで時間に追われることも多く、仕事との両立に苦労が絶えない日が続きますが、こうした時間のマネジメントも含めてMBAなのだという事も、理解出来るようになりました。

いま私は修士論文を執筆する過程にあり、神戸大学MBAでの学びも最終コーナーです。いよいよ最後だという気持ちと、もう終わってしまうのかという寂しさとが、私の中に混在しています。この場で学んだことを、自分自身がどのようにして実社会で役立てていくのか、重圧も感じますが、まずは所属する組織において、MBAで得た経験や知識を役立てたいと思います。そして少しでも社会に貢献できる自分でありたいと、神戸大学MBAでの経験を通じて、より強く感じています。

(編集注:この原稿を依頼した2012年8月の時点で、木村さんは修士論文を執筆中でした)

MBAの経験が 現在の業務にいかに関与しているか

2006年 國部ゼミ修了 湊則男 Ph.D.
(マツダ・ノースアメリカン・オペレーション開発・品質担当 副社長)

MBAに期待する価値として、何を想起するでしょうか。経営者に必要な基礎知識を学ぶ、異業種の人脈を構築する、討議能力・折衝能力を向上する等々色々あります。私は現在、米国カリフォルニアに駐在し、北米市場に導入される商品の開発と品質を担当しています。スタッフは米国人・日本人合わせて100名近くいます。米国は多民族国家なので文化・生活・価値観は様々です。このような中で、組織運営上で一番重要なことは、スタッフ全員の思いを一致させることです。この目的を達成する際に、私の神戸大学のMBA時代の経験が生きています。

神戸大学のMBAではチーム単位で課題が出され、後日、チーム単位で報告するというタスクが多数あります。チームで議論を行うわけですが、異業種でかつ口達者な連中ばかり集まっているので、なかなか意見が収束しません。メンバー全員から意見を出してもらい、議論を収束させ、全員が納得できる解決策を導き出すことがリーダーに与えられる役割です。私はこの役割をできるだけうまく務めるようにしました。全員の意見を冷静に聞き、議論を推進し、全員が納得できるように体系化して報告の方向性を導き出すわけです。徹底的に議論を行い、意見を収束させる段階が必要です。このMBAでの課題解決のプロセスと現在の業務での課題解決プロセスは一致しているわけです。

以上の私の経験から、MBAで学んだことをすぐに実務に応用することは難しいかもしれませんが、中長期視点で見れば、MBAでの経験・知識を企業の業務の中で生かせる機会があることが分かります。



MBA教育を現場で 活用する

2007年 加護野ゼミ修了 澤井恭子
(有限責任監査法人トーマツ)



神戸大学MBAに在学中は、自治体病院の薬剤師として勤務していました。修了後トーマツコンサルティング株式会社に入社し、医療経営コンサルタントとして新たなスタートを切り、現在は親会社であります有限責任監査法人トーマツ名古屋事務所「ヘルスケアグループ」で勤務しております。神戸大学MBA入学のきっかけですが、当時勤務していた病院が累積赤字を多く抱え、コンサルティングが入ったもののような成果を挙げられていない現状に直面し、医療をもっと理解しより具体的に改善策を提案できるコンサルタントの必要性を感じたからです。

神戸大学MBAの授業は、経営コンサルタントとして必要なフレームワークを学ぶだけでなく、問題の背後に隠されている本質を見抜く力を鍛えられました。コンサルタントには、チームで成果を出すことのほかに、ポジションが上がってくるとそのプロジェクト全体を見据えた上で、方向性を打ち出す必要性が出てきます。そのためには、一人で問題を深く考え、あらかじめ仮説を設定し、解決する方法をまとめていくなどプロジェクト全体を率いていく力が求められます。神戸大学の特色であるプロジェクト研究を通して、チームで一定の課題について、成果を出すという経験から、チームワークの大切さや個人の強みを生かし、作業を切り分けるなどコンサルティングを実施する際の方法論を吸収できたと思います。

また修士論文作成では、自分がこれまで業務を実施してきた中で、明らかにしたい問題をじっくり考え、仮説を設定し、解決する方法を研究のプロセスを通じて学びました。特にゼミでは、問題の立て方の重要性を教えられました。問いの立て方がきちんとしていなければ、誤った答えや本当に知りたかった答えが出てこないということを身を持って知ることができたと思います。先生から「頭に汗をかいているか」と問われ、自分の考えが浅いことにずいぶん悩んだこともありました。経営課題は複雑で、常に考え抜くことが求められますが、このプレコンサルティング経験がなければ、現在の私のコンサルタント人生がなかったと言っても過言ではありません。

修了後5年経ちましたが、やっとMBAの各科目が点から線へとつながりつつあります。同時にコンサルティングの成果もより大きく得られるようになってきました。この先の5年、10年もMBAで学んだことをベースに、お客様に価値を感じて頂けるコンサルティングを提供し続けられるよう頑張りたいと思います。

グローバルリーダー SESAMI Program

神戸大学大学院経営学研究科・教授 松尾博文

すべての授業が英語

経営学研究科では、2013年4月より、博士課程SESAMI(Strategic Entrepreneurship and Sustainable Alliance Management Initiatives)Programを開始します。SESAMIの日本語名称は、「戦略的共創経営イニシアティブ」であり、博士課程前期と後期、5年間のカリキュラムのすべてが英語で提供されるグローバル人材育成プログラムです。英語でのコミュニケーション能力が高い外国人と日本人学生を対象としており、必ずしも経営学のバックグラウンドがない人文・理工系出身者にも門戸が開かれているのが特徴です。

「創造」と「共生」の課題に対応

過去20年間、既存事業における日本企業のマーケットシェアと収益性は凋落し、新規事業分野におけるその存在感も希薄であるといえます。日本企業の再生という究極の目的を達成するために、SESAMIが取り組む一つの課題は、日本では、起業、企業内新事業創造、戦略的企業連携等の「創造」が不活発で、また、高度化、複雑化、グローバル化した金融システム、企業ガバナンスについての専門家が不足していることです。

二つ目の課題としては、経済的に実行可能で、他の企業、環境と地域社会との「共生」を図るサステナビリティ・アライアンス経営が日本では展開されておらず、その専門家が不足していることが挙げられます。グローバル経済の金融化による短期志向が世界的な経済危機を招いている現状では、素材・エネルギーの効率的な使用、環境汚染物質の削減、地域社会と共生するグローバルサプライチェーンの構築等の中長期的なサステナビリティの考えを導入することが喫緊の課題となっています。

テーマは「戦略的競争経営」

SESAMIは、この2つの課題を克服するために、共生の経営学と創造の経営学が融合した戦略的共創経営という研究教育領域を定義し、日本のビジネスシステムの強みを継承した形でのグローバルスタンダード(国際標準)の構築を理念とし、新規事業を「創造」し、「共生」を推進する能力を兼ね備えた戦略的経営の専門家(戦略的共創経営人材)をグローバルな観点から養成することを目的とするものです。

博士課程前期1年では、夏季休業期間を設けず、1年中継続するコースワークを海外提携研究機関の教員と神戸大学サイドが共同して英語で教授します。博士課程前期2年では、国際展開企業と連携した、実践的課題解決能力を育成するプロジェクト研究に取り組み、実践的課題解決能力を育成します。さらに、博士課程後期では、博士課程前期で修得した能力を深化、洗練されたものとしていく予定です。

一人材を育成する (セサミ・プログラム)

● SESAMIプログラムの授業科目(すべて英語)、 海外連携先研究機関、連携先企業

	授業科目	海外連携先研究機関	連携先企業
創造経営	アントレプレナーシップ、コーポレートアントレプレナーシップ、グローバルアントレプレナーシップ、コーポレートファイナンス、アントレプレナーファイナンス、ベンチャーキャピタルとプライベートイクイティ、財務会計と知的資産経営 等	カリフォルニア大学リバーサイド、スタンフォード大学、クレアモントマッケンナ大学、ダーラム大学、バブソン大学、ヨーク大学、ストックホルム大学、シドニー大学	パナソニック、カネカ、オムロン、住友電工、バイエル薬品、国際協力銀行
共生経営	サステナビリティ経営、環境会計、グローバルサプライチェーン管理、上級サプライチェーン管理、サービサイジングとサービス管理 等	ロンドン大学ロイヤルホロウェイ、レオハナ大学リユネブルク、WHU、ウィーン経済経営大学、南オーストラリア大学、ワシントン大学セントルイス	パナソニック、カネカ、大阪ガス、コニカミノルタ、積水ハウス、ネスレ
戦略経営	経営戦略、経営行動科学、マーケティング管理、公共セクターとネットワーク産業の経済学、企業経済学、統計学、リサーチ方法論 等	香港中文大学、国立シンガポール大学、リーズ大学、カリフォルニア大学サンディエゴ、MIT、UCLA	



武道場の修復に寄せて 工学研究科教授 足立 裕司

六甲台第一キャンパスのグラウンドのさらにその北西の端に日本瓦葺の木造建築が建っているのをご存じでしょうか。木々に遮られていることもあって目立ちませんが、36系統のバスが六甲台キャンパスの北側に回り込んだ時には車窓から屋根が見渡せます。この建物は、柔道・剣道を中心とした武道場として昭和10年に建てられました。昭和4年、神戸高等商業学校の大学昇格に伴う移転で、最初に建てられた旧神戸商業大学本館(昭和7年)、引き続き建てられた社会科学系図書館や兼松記念館には少し遅れますが、武道場は出光佐三記念六甲台講堂と同じ時期に建てられた建物です。神戸大学の歴史を今に受け継ぐ重要な建物の一つとして、先行して登録された4つの旧商業大学施設に続いてこの春、国の登録有形文化財になりました。

建物の特徴

卒業生は武道場について、上筒井にあった旧高等商業学校の施設の一部が移築使用されたと記録しています。

ならば、この建物は神戸大学に残るもっとも古い歴史を持つ建物ということになりますが、神戸高等商業学校の記録と照合しても規模や形状がぴったりと合致する施設は見当たりませんでした。もし再利用された部材があるなら、今回大規模な修理を行いますので、見極めができるでしょう。

この建物は、武道場ということもあって、この時代に各地で建てられた武徳殿とよく似ています。武徳殿ほど

物々しくないのは建物の高さが比較的低いことにもよると考えられます。武徳殿は、一見すると下屋が四周に廻っているの2階建てにも見える建物が多いのですが、この建物は平屋建てで水平に軒の線が延び、両端にはお寺や神社に見られる反りが付されています。

道場は正面15間、奥行き7間(27.3m×12.7m)。正面中央に入母屋屋根の破風に蕪懸魚、箴欄間が付された車寄せ玄関を配し、式台と呼ばれる踏込みが設けられています。玄関扉には舞良戸と呼ばれる横棧が入った引違い戸が用いられ、中に入ると正面に観音開きの神棚＝写真＝があります。

東西両面に1間半の附属室、便所等を設け、中央に間口12間、奥行き7間の道場をとっています。天井は檜の格天井。全てが格式に添った形式を備えた道場です。



武道場は外見上は日本建築の伝統に沿ったものですが、実はユニークな性格を持っています。入母屋の屋根を支えているのは和小屋と呼ばれる伝統的な形式ではなく、西洋の技法であるキングポスト・トラスが用いられています。実は全国の武徳殿の原型ともなった京都の武徳殿(明治32年、現京都市武道センター)も日本の建築様式に西洋のトラス構造を採用しています。道場という大空間を支えるための知恵として継承されたのでしょうか。

もう一つの特徴は、道場床の独特の「しなり」です。道場を利用した歴代の卒業生が絶賛しています。弾力の

ある床で練習していると体が軽く感じられ、強くなった錯覚に陥るほど。残念ながら、他の試合場では調子が出ずに負けてしまうことも多々あったとか。「この床のしなりだけは失わないようにしてほしい」という要望が修理に際して卒業生達から出されていました。

この床のしなりは、通常であれば床の「ヘタリ」ともいえる悪い兆候です。床下に潜ってみると床を支える大引きと呼ばれている部材をバネで受けて弾力のある床を作っていました。大変に珍しい技法です。今後このような技法が他地区の武徳殿にもみられるのか調査してみる価値があります。

質実剛健なこの道場に似ず、天井の4隅にある換気口＝写真＝には十九世紀末から二十世紀にかけて流行したアール・ヌーヴォーの意匠が透かし彫りに用いられています。本館や図書館にはアール・ヌーヴォーの後に興ったアール・デコ様式が多用されています。おそらくこの道場を設計した文部省技官は、全体は日本の伝統技法に依りながらも、細部にはちょっとした遊び心を出して繊細な意匠を施したのでしょう。



修理までの経緯

武道場は昨年度末に修復設計が行なわれ、今年6月から修復工事にかかっています。かなり以前から武道場を残したいという卒業生の有志の方々のご相談を受けていました。剣道部OBの経済学研究科、藤田誠一先生や空手道部OBの工学研究科、藤田一郎先生らからもご相談を受けました。先に文化財登録を行うことも可能でしたが、阪神大震災には耐えたものの、大空間をもつ武道場の文化財登録には耐震診断が必要という施設部の意向も重要なご指摘であり、耐震診断と耐震補強設計の目処がついた後に、登録文化財として申請することになりました。修理着手とほぼ同時期に登録文化財となった背景にはそうした動きがあったのです。

修理に際しては武道場を使っていた剣道部、柔道部、空手道部の卒業生を中心に募金活動が行われました。1100万円にのぼる浄財が寄附されたことで工事に着手することができました。この建物を残そうという皆様の熱意が伝わってきました。改めてお礼申し上げる次第です。

修理に際して

武道場はこれまでに何度か修理の手が入っています。あまりいい修理であったといえない所もありますが、今まで維持することができているのは小修理のお陰といえるでしょう。老朽化すると使い方も荒くなり、傷みの進

行に拍車をかけます。今回の大修理はぎりぎりのタイミングでの着手であったといえます。一部雨漏りもあり、外壁の下見板の外れたところや、建具の動かないところもありました。その都度行った設備工事も建物を傷めていました。

修理を始めると、調査時点で見えなかった部位などに腐朽や経年劣化が次々と見つかり、予算上の措置に窮することが多々ありますが、構造上の補強や建物の維持に重要な屋根の修理、利用していく際に支障となる欠陥は取り除いていけると考えています。

今回の修理は、予算の制約もあり重要文化財のような完全な修復は予算的にも望めませんが、往時を思わす武道場の姿をご披露できるように努めていきます。やや惜しまれるのはアルミサッシに改変されていた建具を元通りの木製建具に戻せなかったことですが、工事終了後でもできる工事ですので、時期を見て取り替えていただければ願っています。



武道場内部



武道場西側面

神戸大学武道場の歩み

附属図書館大学文書史料室長補佐 野邑理栄子

神戸大学武道場は今年で竣工77周年を迎えました。通称「六甲台道場」と呼ばれるこの建物は、旧制神戸商業大学柔剣道場として1934(昭和9)年8月25日に起工、12月22日の竣工予定日の延期により翌1935(昭和10)年1月22日に竣工しました。施工業者は森下組です。同社による同日竣工の学生集会所(木造2階建、一部平屋建)はすでに近代的なアカデミア館に生まれ変わって現存せず、唯一この武道場だけが本学に残る貴重な近代木造学校建築物です*。通称「六甲台グラウンド」の北西端に位置し、現在はフェンスや高層建築物等によって遮られています。竣工当時は眺望絶景で海まで見渡せたそうです。凜とした威容を誇る瓦葺き木造平屋建のこの道場は「艱貞堂(かんていどう)」と命名され、1935(昭和10)年7月7日開催の「艱貞堂開館記念高橋範士喜寿祝賀剣道大会」、同月14～16日開催の「第五回三商大戦」柔道大会を皮切りに、以後学生たちの青春の舞台となりました。ところが、太平洋戦争の激化により様相は一変。1943(昭和18)年学生の課外活動が中止となり、戦後も空襲で家を焼失した大学職員の住居として道場が利用され、ようやく新制神戸大

学発足5年後の1954(昭和29)年に本来の学生修練の場としての姿を取り戻しました。その後1980(昭和55)年、1985(昭和60)年に武道場の建て替え計画が浮上。強い反対の声が上がり回避されましたが、さらに1992(平成4)年大学院国際協力研究科の新学舎建設に伴い武道場を鉄筋コンクリート造3階建の共同施設に建て替える計画が持ち上がりました。翌年柔道部・空手道部・剣道部の3武道部各OB会長が連名で「武道場の保存に関する要望書」を提出、大学側も武道場撤去を当面断念しました。さらに2010(平成22)年、3武道部OB会が武道場の国登録有形文化財への登録を目指して大学当局に働きかけ、翌年武道場保存改修整備費として総額1,100万円を神戸大学基金に寄附**。また、これまでの4つの国登録有形文化財の登録に尽力された工学研究科足立裕司教授(近代建築史)の強力な力添えもあり、こうした関係諸氏の熱意が実を結び、今年武道場は、国登録有形文化財への登録が決定されました。11月には、書家としても著名な魚住和晃神戸大学名誉教授(書道史・筆跡学、雅号は卿山)揮毫の新看板「艱貞堂」が掲げられます。

今後も武道場では、学生たちの熱戦が繰り広げられることでしょう。



竣工まもなくの神戸商業大学柔剣道場「艱貞堂」(現在の神戸大学武道場)

* 女子寮南西側の倉庫(1940(昭和15)年竣工、木造平屋建)を除く。

** 戦中戦後の状況、武道場建て替え問題、文化財登録への働きかけについては、柿聰「六甲台武道場の歴史」(『陣鼓』第24号、神戸大学柔道部・同後援会、2012年6月)に詳しい。なお、寄附金は当初1,000万円だったが後に1,100万円に増額された。

剣道部

剣道部の創部は1903(明治36)年。学友会武術部の中に撃剣部としてスタートしました。初代校長・水島鏡也先生が東京高商の初代剣道部長だったこともあり、早々に高橋越太郎先生を初代師範にお迎えできました。大正から昭和初年にかけて全国高専大会で3回優勝などの輝かしい記録が残っています。初優勝の時には、水島校長から直筆の優勝を祝う漢詩の掛け軸を頂き、そのレプリカは現在も剣道部に伝わっています。現在の武道場「艱貞堂」が完成した1935(昭和10)年には、高橋先生の喜寿の祝賀会と開館記念を兼ねた演武大会が開催されました。写真は、当日の高野佐三郎師範と高橋越太郎師範による大日本帝国剣道形の演武です。

戦後しばらくの間はGHQによって剣道は禁止されていましたが、1953(昭和28)年に神戸大学剣道部として復活、酒井茂雄師範のご指導で活動を再開しました。戦後の戦績としては、男子では関西の優勝大会(団体戦)でベスト4が5回、個人戦では2位入賞3人、3位入賞2人などがあげられます。また女子では、団体戦ベスト4が1回、個人戦では2位入賞1人、3位入賞2人となっています。

剣道部のOB会は、1923(大正12)年に挙行された大学へ



の昇格を祝う開学20周年記念式典の席上で創設され、水島校長により凌霜剣友会と命名されました。その後、凌霜神戸大学剣友会を経て、現時は神戸大学剣友会として600人近い会員で構成されています。

2003年4月には剣道部創部100周年、剣友会創設80周年、戦後剣道部復活50周年を祝う記念式典を開催。剣道関係の来賓23人を含む200人超が参加、剣道部は新たな100年に向かって歩み始めました(詳しくは、『神戸大学剣道部創部百周年・剣友会創設八十周年記念誌』参照)。

剣道部は現在、鈴木康功(範士八段)先生のご指導の下、月曜日から土曜日まで週6日の稽古、年3回の合宿などを通じて、厳しい鍛錬に励んでいます。主要な大会は、全日本大会への出場をかけて戦う関西の個人戦(春)と団体戦(秋)ですが、その他に兵庫県大会と近畿地区国立大学体育大会があります。対抗戦としては、1934(昭和9)年以来の伝統を受け継ぐ旧三商大剣道大会が1年の最後を締めくくる重要な大会と位置づけられています。京都大学、大阪大学とも定期戦を行っています。また、月に1回OBと学生が剣を交える場としてOB合同稽古会が開催され、2009年には東西のOBが競い合う東西対抗試合も始まりました。

柔道部

1903(明36)6月創部から110年を迎えるにあたって、柔道部略史を記す。1905(明38)出光佐三(出光興産創業者)らが入部し、部活動の新興に尽力。1908(明41)石井光次郎(のちに副総理、第54代衆議院議長)が入部。1910(明43)丸谷喜市 卒業(部OB、大15~昭17柔道部長、昭和17学長に就任)。1916(大5)7月、東京高商との第1回定期戦挙行。大将決戦の末、神戸の勝ち。この試合は、柔道史上に残る名勝負として、丸山三造著「世界柔道史」に掲載された。1935(昭10)六甲台武道場「艱貞堂」落成。7月、新道場で第5回三商大戦が実施され、本学が優勝した。1942(昭17)柔道部長に田中保太郎(部OB、昭24神戸大学長)が就任。1943(昭18)太平洋戦争のため部活動が中止となった。

1945(昭20)~50(昭25)GHQによる学校柔道の禁止。1953(昭28)新制3回平松伸夫・池田昌之、4回清水國弘・斎藤發司らが中心となり、柔道部を再興した。同年11月、復活第1回三商大戦を大市大にて開催。1954(昭29)第1回神戸市大学大会にて優勝、以後、昭33まで春秋通算9連勝した。1970(昭45)~77(昭52)三商大戦8連覇の偉業を達



(昭10)落成直後の道場で三商大戦優勝。前列左3人目から山本師範、田中、丸谷、磯貝十段、安国師範、村治師範の各氏

成。1985(昭60)「神戸大学柔道部回顧録(戦前戦中編)」(B5判210頁)を刊行した。

1989(平1)柔道部長に千原和夫医学部教授(部OB)が就任。部誌「陣鼓」を創刊し、則武保夫部長(部OB)御退官記念号とした。

1995(平成7)1月17日、阪神・淡路大震災が発生、柔道部は休部状態になったが、3月10日には六甲台武道場での練習を再開した。震災というハンディキャップにもかかわらず、むしろそれをバネにして、9月には創部以来初の全日本学生優勝大会に出場する。11月の三商大戦では二連覇を達成した。翌年も団体・個人で全国大会出場や近畿国立大会優勝(10回)を成し遂げた。2003(平15)7月、創部百周年(戦後再興50年)記念事業の一環として「神戸大学柔道部回顧録(戦後編)」(B5判348頁)を刊行する。2012(平24)6月現在、現役部員15名、後援会OB394名を数える。部員たちはOBの支援を受けながら、文武両道を目指して、日々稽古に励んでいる。

このような神戸大学柔道部の歴史と伝統が、六甲台武道場とともに、21世紀においても、ますます強固なものになることを信じている。(※文中、敬称略)

空手道部

六甲台道場の内外を取り巻く空間は、空手道部の部員にとって神聖な鍛錬の場所として大きな存在であり続けています。筆者が部員当時は、練習前に新入部員が雑巾がけ。水気の残る床に正座し、黙想した後に練習を始めたものでした。黙想中の純粋な感情や雰囲気は今では滅多に感じるこのできない神聖なものでした。練習は、数十回の拳立てなど厳しい鍛錬で締めくくられ、今度は汗のために湿気を帯びた床に正座し、再び黙想することで終わりを告げました。拳立ての際には顔が黒光りする木の床板に近づくわけですが、この時に



感じた木の匂いは、これまでの道場の歴史が残した香りであったといっただいでしょう。道場外の空間では、ワラ縄を巻きつけた薪割り用の板に向かい、拳が鍛えられるまでひたすら突き練習。血も滲んできました。近代の合理性など全く無視したような練習でしたが、成果もありました。昭和50、51年度と連覇した全国国立空手道大会です。写真は最初の全国制覇の年に道場前で撮影したものです。これからの若者たちもこのような道場の歴史や伝統を感じながら練習に励んで頂きたいと願っています。(空手道部部長、藤田一郎、昭52卒)

神戸大学体育会 硬式野球部

- ① 1903年
- ② 64名(選手54名・マネージャ
ー4名・コーチ5名・監督1名)
- ③ 54:4
- ④ 6日/週
- ⑤ 六甲台グラウンド
- ⑥ 12時30分頃~16時30分頃



主務
経営学部4回生
加藤 豊

—歴史ある野球部。

先輩とはどのように交流していますか？

OBは600人以上います。OBはメーリングリストを通じて試合結果などを知ることができます。毎年11月か12月にOB戦。それ以外に関東、関西でOB総会を開いています。

—普通の練習はどのようにしていますか？

グラウンドはサッカー、ホッケー、ラグビー、ラクロスとの共用です。このため火~金曜の12時40分から16時半まで、土日はこれが10分プラスされるだけです。効率よく練習するために打撃、走塁、守備の部門リーダーが話し合い、スケジュールを作ります。基本、大学の講義優先です。

—印象に残っている試合、シーズンは？

2011年の秋季リーグ戦後の入れ替え戦です。私たちは近畿学生野球連盟に所属していますが、2010年の春に2部落ちが決まり、2011年春は入れ替え戦まで進みながら勝てませんでした。この後は必死で練習しましたが、先輩たちが私たちに引っ張ってくれて…。秋の入れ替え戦では2試合とも8-1でコールド勝ちして1部に復帰しました。うれしくて、グラウンドに戻ってからビールかけしましたよ。もちろん飲んでません。

—これからの目標を教えてください。

秋季リーグでの優勝に尽きます。一年上の先輩たちにはとても感謝しています。先輩たちは1部で試合していない。それは悔しかったと話しています。私たちはおかげで春、秋の2シーズンを1部で戦えます。優勝してお返しするしかないと思っています。



神戸大学よさこいチーム 山美鼓

- ① 2009年
- ② 約55人
- ③ 3:7
- ④ 2、3回/週
- ⑤ 発達科学部キャンパス
- ⑥ 2時間程度



代表
発達科学部2回生
神田 優作

—出来て間もないサークルと聞きました。

発達科学部人間表現学科に「よさこい」を研究している先生がいます。その受講生がよさこいを踊って楽しさにはまったのがきっかけです。2009年によさこいチーム「山美鼓」を結成、2010年から全学に輪を広げています。

—よさこいの魅力はどこにありますか？

多人数で一つのものを作り上げるのが面白いですね。踊りの技術の上手下手よりも、皆が気持ちを一つに合わせて踊るのが重要と思っています。

—踊りは毎年変わるのですか？

振り付け、曲、衣装ともに毎年変えています。曲を作る業者さんもあるのですが、発達科学部には音楽に長けた学生もいて、曲を作ってもらっています。衣装も自分たちでデザインしていますし、振り付けも考えます。

—2012年の踊りのテーマは何ですか？

「宝島」です。よさこいを始めて、チームメンバーからお客さん、他のチームの方たちともつながりが広がりました。それこそが私たちにとっての宝であると捉え、試行錯誤して宝島にたどり着くというストーリーを考えています。

—印象に残っている舞台を教えてください。

神戸よさこい祭りで、私たちの2010年度オリジナル演舞「DANCE DANCE」を合同演舞したことです。子供から社会人まで総勢250人が踊ったのは貴重な体験でした。

—これからの目標を教えてください。

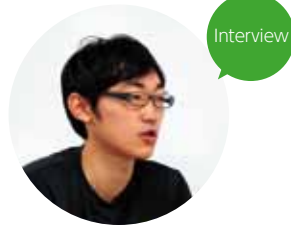
観客に笑顔や元気、感動を与えられるチームにしたいです。そして神戸をよさこいで盛り上げる、その中核に「山美鼓」がいたいと思います。



外国から来た子どもの
学習支援団体

MoMo

- ①2010年
- ②11人
- ③4:7
- ④1回/週
- ⑤神戸市住之江公民館別館
- ⑥日曜日10:00~12:00



部長
発達科学部3回生
末安 和樹

—いつ活動を始めたのですか？

2010年からです。神戸は外国人の子どもが数多く住んでいます。ただ日本の社会は外国にルーツを持つ子どもたちに割と寛容ではありません。案内表示が日本語表記だけだったり、学校の授業も外国人の子どもたちのニーズに合っていない。そこで子どもたちの支援に乗り出しました。

—どのような活動をしていますか？

今、11人のメンバーがいます。東灘区の住江公民館別館で日曜の午前中に教室を開いて、日本語で学校の勉強を教えています。日本の生活が長くなったり、日本語教室で勉強して日本語をある程度習得した子どもたちが対象です。中学生がテスト範囲の勉強をしたり、高校生がセンター試験の過去問に取り組んだりしています。今はちょうど狭間で高校生2人です。

—難しいのはどういったところですか？

中国人の子どもが多いのですが、漢字の意味が日本語と中国語で違うことがあります。それで子どもたちが納得しないときには、メンバーの中に中国人もいますので手助けしてもらっています。言葉の壁をいろいろと工夫しながら乗り越えています。

—メンバーは子どもたちにとってどんな存在なのでしょう？

近所のお兄ちゃんという感じです。遠くもなければ近すぎもしない。家族と関係のないお兄ちゃん、お姉ちゃんがいたほうが視野が広がると思います。MOMOを卒業した後も子どもたちとは長く付き合っていきたいです。



素人ちんどん
神大モダン・ドンチキ

- ①2000年
- ②22人
- ③4:7
- ④2回/週
- ⑤国際文化学部キャンパス
- ⑥4限終了後~8時まで



文学部3回生
伊藤 あすか

—出来たきっかけから。

阪神淡路大震災のときに学生震災救援隊が結成されました。ボランティアするうちに、被災者の方たちを元気づけたい、にぎやかをしたら喜ばれるのではと始めたのがきっかけですね。2000年になってチンドンをセミプロの意識でやる「モダン・ドンチキ」が発足して今に至っています。

—依頼があって現場に行くのですか？

化粧や衣装、道具にお金もかかりますし、必要経費を依頼料としていただいています。「商店街をにぎやかに来て」とか、夏祭りの余興、老人ホームの慰問も多いですね。

—年間、何回くらい出かけているのですか？

昨年、今年は多くて70回以上。お金がなくてプロを呼べないというところには出来るだけ行きたいですね。それをこなす部員は学部生、院生が20人。社会人の方も2人入っています。

—どんな曲でパフォーマンスするのですか？

歌謡曲で、藤山一郎さんとか美空ひばりさんの曲が多いです。いまどき過ぎる曲は太鼓と調子が合わないので、どうしても古い曲になります。

—やりがいを感じるのはどんな時ですか？

喜んでもらったときですね。おばちゃん、おばあちゃんたち女性はノリがいい。

—コンクールには出るのですか？

4月の富山のコンクールと10月の愛知県一宮市のコンクールに参加します。一宮には3チーム出場しますが、昨年、私のチームが優勝しました。富山も優勝したいですが、何より観客の気持ちが分かるチンドン屋になりたいです。



2012年度「育友会全学懇談会」を開催しました

2012年度の神戸大学育友会全学懇談会を6月9日(土)午後2時から出光佐三記念六甲台講堂で開催しました。雨模様でしたが、ご家族で来学される方も多く、約350人の新生保護者が出席されました。

育友会を代表し、早瀬新理事長から育友会の目的・事業についての説明と、昨年の東日本大震災の被災地支援として神戸大学学生の被災地におけるボランティア活動(借り上げバス代)の一部を援助し、今年度も引き続き支援することを報告、今後も育友会事業へのご協力をお願いしたいと挨拶しました。

福田秀樹学長は、最近の神戸大学の歩みについて報告の後、育友会からのこれまでのご支援に対してのお礼と引き続き学生への支援のお願いをしました。田中康秀副学長(教育担当)は「グローバル化時代の神戸大学の教育について」と題して、本学の教育組織・教育ビジョンや大学教育に求められているものについての講話とともに、保護者により良い教育実現のために協力いただきました

いとお願ひし、続いて、石田廣史副学長(学生・入試・広報担当)が学生生活面での支援、及び生活上の注意点を説明され、学生の自立を促すよう協力を求めました。最後に、城仁士キャリアセンター長が、本学の就職状況及び、今年度からキャリアセンターにボランティア支援部門が新設されたことで、「人間性豊かな指導の人材」の育成を目的とし、学生をサポートすることになる旨の講話と学生が自分自身の力でキャリアを切り開いていけるよう、保護者等の協力を願ひし、閉会となりました。



全学懇談会終了後は各学部にて会場を移動し学部別懇談会が開催されました。各学部とも学生生活、留学、進路・就職状況について質疑応答があり、熱心な意見が交換されました。

(学務部教育支援課)

工学研究科卒業生の佐川真人さんが世界最強のネオジム磁石の発明により日本国際賞を受賞

佐川真人さんは、1968年神戸大学大学院工学研究科電気工学修了後、東北大学大学院博士課程(金属材料工学)で工学博士の学位を取得した。その後、1970年代当時最高性能と云われていたSm-Co(サマリウム-コバルト)系磁性材料よりも、自然界に豊富にあるFe(鉄)を使った、更に強力な永久磁石材料の研究開発に意欲を燃やし、1982年、従来の約2倍の最大エネルギー積が得られるNd-Fe-B(ネオジム-鉄-ボロン)系磁石の組成を発見した。

この素材は高性能であるが、様々な耐熱環境下で安定した性能を発揮する為の添加元素の最適化と、量産化技術の開発に多大の努力が必要であり、短期間で見事に完成させた事は大変素晴らしく、これに勝る永久磁石材料は容易には出現しないと見られている。1985年に製造開始されたNd-Fe-B系磁石は毎年倍増生産。こ

れを用いたモーターは小型軽量で高い効率を得られることから、携帯電話、ハードディスク、エアコン、冷蔵庫、洗濯機、掃除機、エレベーター、工作機械な



どに広く使われ、省エネルギーに大きく貢献している。また、地球温暖化対策としての風力発電機の高効率発電機やハイブリッド自動車や電気自動車のモーター/発電機の全てに使用されるなど、省エネルギー、CO²排出量削減への貢献度がますます増大している。このような素晴らしい佐川真人さんの業績は、2012年の日本国際賞受賞にふさわしい。本当におめでとう。

河原 伸吉(1966年電気工学科卒業、電気電子工学科同窓会「竹水会」会長)

さまざまな人との出会いを大切にしよう



神戸大学大学院医学研究科
糖尿病・内分泌内科学
細胞分子医学(兼任)

清野 進

平成23年11月の紫綬褒章受章は、私たちの30余年にわたる糖尿病に関する研究が認められたものであり大変うれしく思います。

私は1974年に神戸大学医学部を卒業し、附属病院で1年間研修医として勤務した後は国内ならびに海外での医療機関、大学や研究機関で勤務しました。2003年に29年ぶりに母校に戻るまで実に

11カ所の異なる機関を経験しています。神戸大学で井村裕夫教授(現先端医療財団理事長)との出会いにより代謝・内分泌学に導かれ、米国ではミシガン大学のFajans教授との出会いによって、その後10年続く私の米国での研究者としての道が開かれました。そしてカリフォルニア大学サンフランシスコ校、シカゴ大学ではBell教授に分子生物学の指導を受け、友情を育みました。シカゴ大学では医学者としてまた人間として私の生涯の師であるSteiner教授と出会いました。そして谷口克先生(現在、理化学研究所横浜研究所センター長)との出会いによって帰国、千

葉大学で米国での研究を発展させ、平成15年からは千葉大学のメンバーのほぼ全員で神戸大学に移り、恵まれた環境の中、さらに研究を進めることができました。このたびの栄誉に浴することができたのは、偉大な師に導かれるとともにこの間に会った素晴らしい教職員、研究員、学生と一丸となって研究を続けることができたおかげです。

これまでの人生を振り返ってみますと、様々な人との出会い、人との良いコミュニケーションによって、良い研究成果

が生まれることはもちろんのこと人生に新たな展開、素晴らしい展開がもたらされることを痛感しています。そのためには、私自身が心に留めてきた1)一つの世界に留まらない、2)変わっていくことを恐れない、3)何かを始めるのに遅すぎることはない、4)素朴な疑問を追い続ける、5)論理だけでなく感性も大切にすることが重要だと思います。皆様、これらのことを是非心に覚えていろいろなことにチャレンジし、素晴らしい人生を送ってほしいと願っています。

第3回卒業生との懇談会 (拡大ビジネスリーダーの会)を開催しました

創立110周年を機に「拡大」と冠をつけ、ビジネス会で活躍している若手・中堅の方にも広く参加いただき、新たな繋がりを広げ、大学の現状や課題、将来像を話し合う「神戸大学拡大ビジネスリーダーの会」が2月29日、東京・丸の内東京商工会議所で開かれました。

神戸大学ではこれまで2回、経済界の第一線で活躍する企業の役員クラスの卒業生と学長・理事が集い、「ビジネスリーダーの会」と称して懇談会を開催しており、これが3回目。

当日は関東地区が雪に覆われるなか、143名もの卒業生が集い、母校に対する色々な提言や意見が述べられました。最初に福田学長が「創立110周年を迎え神戸大学が目指すべきところ」と題し、【研究】【教育】【社会貢献】【大学経営】の4つを軸として、神戸大学の今後のビジョンと決意を述べました。続いて、田中理事(教育担当)から「社会科学系教育研究の現状と展望」、中村理事(国際交流担当)から「神戸大学教育研究の国際化対応戦

略」、竹園理事(財務担当)から「大学の財務状況」、安藤学長補佐(基金担当)から「基金の現状」の説明がありました。

引き続き、質疑応答の時間が設けられ、出席者からは、「秋入学」、「神戸大学の国際化(グローバル人材の養成)」、「神戸大学卒業の優秀な研究者との連携」、「留学生の活用」など、各人の神戸大学への思いと共に、質問や発言が述べられました。

この後は懇談会へ移り、和やかな雰囲気のもと出席者同士の活発な意見交換や交流は続きました。ご参加いただいた方からの熱い思いや意見は、大学全体として真摯に受け止め、今後も卒業生と大学が思いを語り共有する場として、会を継続していきたいと思えます。

(企画部社会連携課)



佐伯壽一 新学長補佐に聞く(神戸大学基金)



Profile

神戸大学経済学部 昭和45年卒 同年(株)神戸製鋼所入社 リビア・ミスラタ建設事務所業務課長、新鉄源プロジェクト推進部長、機械エンジニアリング事業本部企画管理部長、デュッセルドルフ事務所長、大阪支社長を歴任し、平成14年より平成23年まで神鋼ケアライフ(株)社長、平成24年4月より神戸大学学長補佐

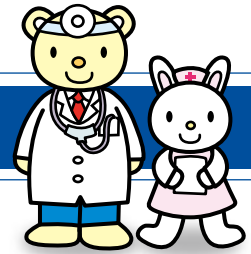
大学における教育研究活動は社会の発展を支える社会的基盤になり得るものであり、個人の生活、産業基盤さらには国力にも直結するものと考えます。その意味において国立大学においては、公的支出によって大学運営の財政的基盤が安定的に確保されるべきだと考えますが、法人化以降は競争的環境の中で、未来に対する大いなる投資を大学自らが確保することが求められます。神戸大学基金はその投資の受け皿として創設され、中長期的な時間軸の中で投資効果を社会さらには世界に還元していく使命を負っています。

神戸大学基金は、「神戸大学ビジョン2015」が標榜する「グローバルエクセレンス」の実現にむけて具体的には以下のような活動を行っていきます。このほかにも寄附者名称奨学金などの寄附者名称記念事業があります。

- ・神戸大学在学生の国際化支援(海外協定校への派遣支援など)
- ・海外向け発信支援(英語論文作成個人指導など)
- ・在学生の課外活動支援
- ・ダブルディグリープログラム留学生支援・海外研究者の招聘支援
- ・緊急奨学金・基金奨学金(学部1年次対象)給付
- ・首都圏におけるプレゼンス向上を目的とする活動(在学生の就職活動支援含む)
- ・施設・環境整備の支援(登録有形文化財の武道場改修、全学共通グラウンドの人工芝化推進)

「神戸大学基金」へ寄附をすることは、日本の未来への投資だとお考えください。

そして神戸大学はその投資に対する成果をコミットいたします。ぜひともお力添えをいただきますようよろしくお願いいたします。



保健管理センターだより

みんなで防ぐインフルエンザの大流行・・・ 風邪症状のある時は大学に連絡して自宅療養を！ ～ 神戸大学「感冒様症状者に係る届出制度」～

今年もまもなくインフルエンザの季節を迎えます。平成21(2009)年に世界的に大流行した「新型インフルエンザ」(インフルエンザ H1N1/2009)は、幸い危惧された強毒性インフルエンザではありませんでしたが、今後も新たなインフルエンザが発生する可能性は常にあります。神戸大学ではインフルエンザ H1N1/2009の流行時に「感冒様症状者に係る届出制度」を設け、インフルエンザの大学内での流行状況の観察(サーベイランス)と、感染拡大の防止に役立てています。

インフルエンザウイルスの亜型と新しいウイルス

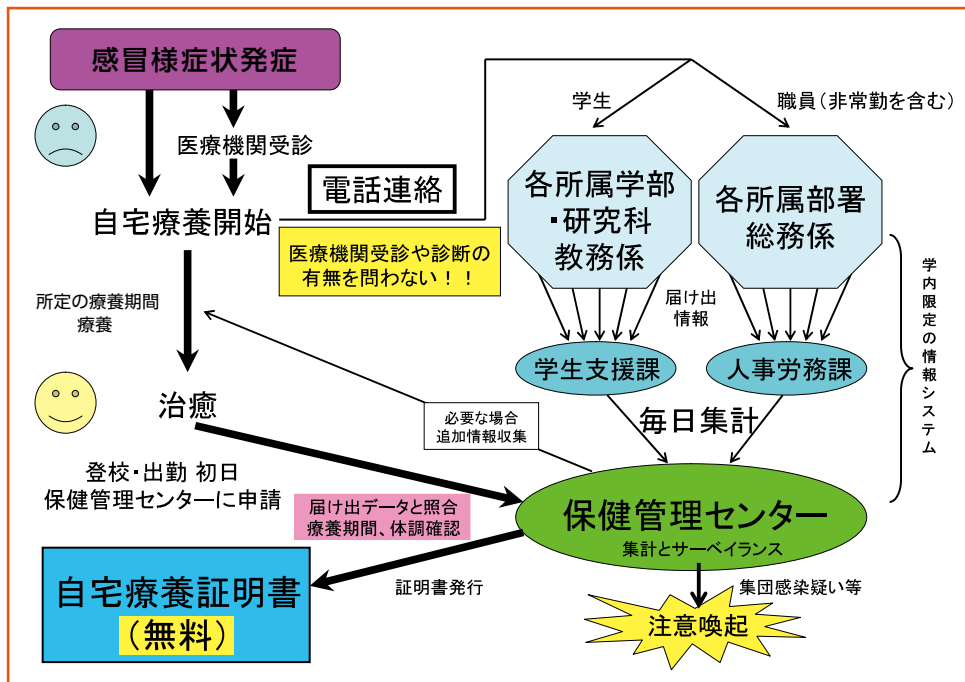
インフルエンザウイルスにはA型、B型、C型の3種類があり、A型はヒトやブタなどの哺乳類と多くの鳥類に、B型は人とアザラシに、C型はヒトとブタに感染することが知られています。中でもA型は、今までもスペイン風邪(1918年)、アジア風邪(1957年)、香港風邪(1968年)などヒトへの大流行や、家禽・家畜への流行により、多大な人的・経済的損失をおよぼしてきました。今日ではヒト、家禽、家畜のA型インフルエンザウイルスは全て、渡り鳥であるカモのウイルスに由来することが判っています。

A型インフルエンザウイルスはウイルス表面の2つの糖蛋白質であるヘマグルチニン(H1～16の16種類)とノイラミダーゼ(N1～9の9種類)の組み合わせによって144種類の亜型に分類されています。例えばスペイン風邪の原因となったウイルスはH1N1、アジア風邪のウイルスはH2N2、香港風邪のウイルスはH3N2でした。ヒトが経験したことのない新しいヘマグルチニン亜型を持つウイルス(H5N1など)がヒトからヒトへと感染する能力を獲得すると大流行を引き起こす可能性があり、恐れられているのです。

神戸大学における「感冒様症状者に係る届出制度」

インフルエンザ H1N1/2009は発生当初、従来のインフルエンザよりも致死率が高いといった情報がもたらされ、空港での検疫体制の強化や病医院での発熱者への隔離対策など、世界中で大騒ぎとなりました。国内初の患者が神戸市で確認されたこともあり、兵庫県では感染拡大防止のために全ての県立学校の休校措置と全県の小・中・高等学校に対する休校措置要請が行われ、神戸大学でも1週間に渡って学部・研究科の全ての授業を休講し、課外活動や講演会・カンファレンスなど人の集まる活動を禁止する措置がとられました。

インフルエンザについては従前から学校保健法(現、学校保健安全法)で「解熱後2日を経過するまで出席停止とする」旨、定められていましたが、風邪症状があっても登校したり、厳密には守られていないのが実情でした。また、インフルエンザ H1N1/2009の発生を受けて、厚生労働省から「発症の翌日から7日、または解熱後2日を経過するまで出席停止とする」旨の通知が出されましたが、インフルエンザを診断するための検査そのものにも問題があり、インフルエンザにかかった人が病医院で「インフルエンザではない」と診断されてしまう可能性も高かったのです。

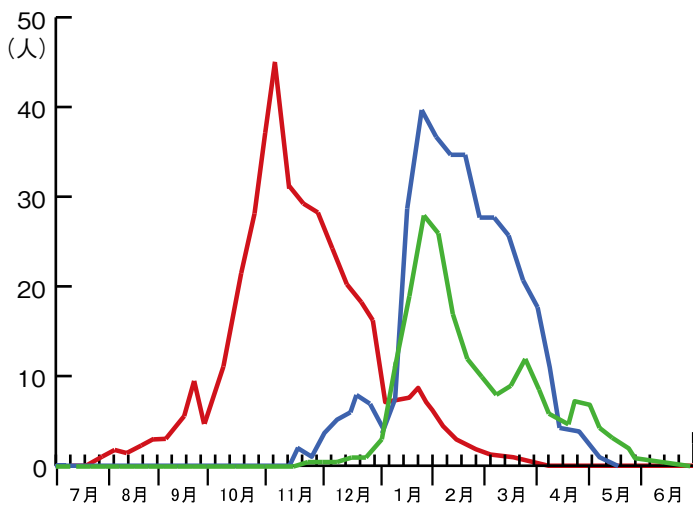
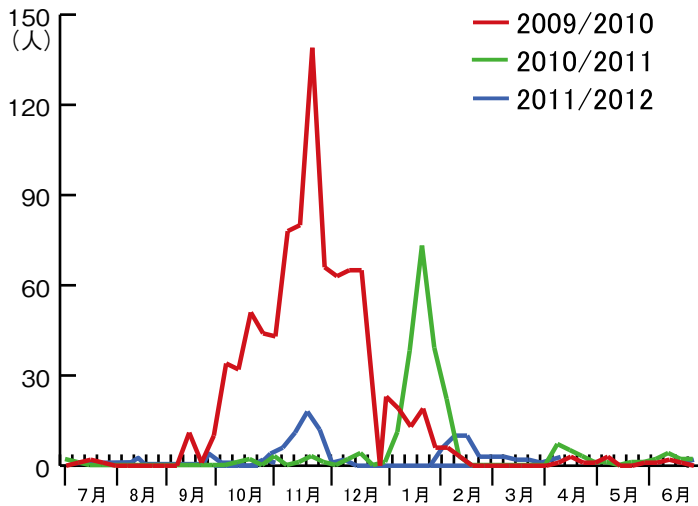


こうしたことから、神戸大学ではインフルエンザと診断されていなくても、感冒様症状があれば大学に電話連絡して自宅療養できることとし、感染者が登校・出勤することによって起こる大学内や通学・通勤経路における感染拡大の防止を図ることにしたのです。また、このことは不必要な病医院への受診を減らし、社会として限られた医療資源を、より重症の方に回すことにも繋がりました。

「感冒様症状者に係る届出制度」(図1)では、感冒様症状のある学生や職員は所属する学部・研究科等の教務係(職員は総務係)に連絡し、発熱などの状況に

(図1) 神戸大学における「感冒様症状者に係る届出制度」

についての質問(問診項目)に答えます。これによって病医院に行くことなく、「発症の翌日から7日、または解熱後2日を経過するまで」自宅療養をすることができ、所定の期間を過ぎて登校・出勤する際には保健管理センターで診察を受け、「自宅療養証明書」を受け取ることができるようにしたのです。体調不良を押しての登校・出勤を防ぐため、学生では単位取得に影響を与えないよう、職員では「自宅待機命令」を受けての公休として取り扱われるよう、配慮されました。その後、平成24(2012)年4月に学校保健安全法におけるインフルエンザによる出席停止期間が「発症後5日を経過し、かつ、解熱後2日を経過するまで」とされたことに伴い、この制度もそれに準じた自宅療養期間として運用されています^{注)}。



(図2)「感冒様症状者に係る届出制度」に基づく神戸大学生からの報告数(上段)と、神戸市定点医療機関当たりのインフルエンザ患者報告数(下段)の推移

「感冒様症状者に係る届出制度」によるサーベイランス

この制度では、電話連絡を受けた担当者によって入力された問診項目への回答結果は、学生支援課や人事労務課での集計の後、保健管理センターに送信され、インフルエンザの神戸大学における流行状況の観察(サーベイランス)に供されています。また、問診項目には所属課外活動団体や周囲の人達の発症状況に関する事項も含まれ、集団感染が疑われる場合には該当する課外活動団体や学部・研究科等への注意喚起・保健指導も行われます。

インフルエンザ H1N1/2009の流行年やそれ以降の年の電話連絡による学生からの報告数の推移(図2、上段)は、神戸市定点医療機関当たりのインフルエンザ患者報告数の推移(図2、下段)と良くシンクロナイズしています。また、インフルエンザ H1N1/2009の流行は、例年とは異なる早い時期に起こったものであることがわかります。この制度は毎年のインフルエンザのみならず、強毒型インフルエンザが将来流行した時にも、神戸大学における流行状況の把握と臨機の感染拡大防止対策の策定に役立つものと期待されているのです。

健康管理のために自分の体温を知る！

この制度における電話連絡時には、発熱などの状況についての問診項目に答えていただきます。体温には腋下温、舌下温、直腸温、鼓膜温などがあり、日本では一般に腋下温が体温測定に用いられています。10歳代から50歳代の平均体温は $36.89 \pm 0.34^{\circ}\text{C}$ とされていますが個人差があり、朝低く夕高い傾向や、食事・運動・入浴による影響もあります。ですから、体調の良い時の自分の体温(平熱)を知っておく事が大切です。自らの健康管理のためにも体温計を手許に置き、体調がすぐれない時には測ってみましょう。発熱は感染症の他、免疫疾患やホルモンの異常、腫瘍などのサインであることもあります。変だなと思ったら、保健管理センターにご相談ください。

注) 病気の種類によっては、学校保健安全法施行規則に出席停止期間が別途定められているものがあります。また、医療機関からの診断書が必要になる場合があります。試験や実習等の代替措置については学部・研究科によって対応が異なる場合がありますので、各学部・研究科の教務係にお尋ねください。

参考

1. 馬場久光:流行っています!…ヒトインフルエンザと鳥インフルエンザ。六甲ひろば 78:11, 2004
2. 国立大学法人保健管理施設協議会 エイズ・感染症特別委員会: インフルエンザとキャンパス感染症 ガイドブック 2009, カマル社, 東京, 2009
3. 国立大学法人保健管理施設協議会 エイズ・感染症特別委員会: インフルエンザとキャンパス感染症 ガイドブック 補遺2010, カマル社, 東京, 2010
4. 兵庫県新型インフルエンザ対策検証委員会:兵庫県新型インフルエンザ対策検証報告書～第2波に備えた対策に関する提言～, 2009 <http://www.hyogo.med.or.jp/influenza/data/pdf09090701.pdf>
5. 大阪府健康医療部:新型インフルエンザ(A/H1N1pdm2009)対策の検証, 2010 http://www.pref.osaka.jp/attach/6188/00097494/220928_kensho-zentaiban.pdf
6. テルモ体温計研究所 <http://www.terumo-taion.jp/temperature/index.html>

保健管理センターだより 81

(神戸大学広報誌「六甲ひろば」から引き続き連載) 保健管理センターの詳細につきましては、保健管理センターホームページでも案内しています。

<http://www.health.kobe-u.ac.jp/>

世紀を超えた神戸大学

創立110周年

神戸大学は今年創立110周年を迎えた。創立記念日の5月15日に挙行された記念式典では「学理と実際の調和」をテーマに講演が行われ、また、110周年を契機として「世紀を超えて～神戸大学」(For 110 years and beyond)をキャッチフレーズに、特にEUの高等教育機関との連携など本学の国際性を活かした新たな教育システムの構築に邁進することとなった。

こうした本学の取り組みの基底には、創立以来の歴史と伝統が存在する。

神戸大学創立の起点

今から110年前の1902(明治35)年3月、兵庫県で最初の高等教育機関として、神戸高等商業学校が設置された。これが神戸大学の創立の起点である。東京に次ぐ全国2番目の高等商業学校だが、神戸への設置が決定されるまでには、商都大阪をライバルとした壮絶な誘致合戦があった。結局、日本有数の国際貿易都市である神戸こそが、世界に羽ばたく海外貿易人を育成する場にふさわしいとする主張が認められ、わずか1票差で神戸が大阪に競り勝ったのである*。当初の校地は神戸市葺合町筒井村字籠池(現在の中央区野崎通(神戸市立葺合高等学校敷地))にあり、1903(明治36)年5月15日に授業が開始された。この授業開始日が現在の神戸大学創立記念日に当たる。

*第二高等商業学校の設置場所は当初神戸に内定していたが、大阪が名乗りを上げたため、帝国議会で壮絶な論戦が繰り広げられ1票の僅差で神戸設置が決定した。

実地活用と国際性

神戸高等商業学校初代校長水島鍊也は、開校式の式辞で次のように述べた。「日常の授業上に於ては所謂学理に偏するの弊を避けて、成るべく実地活用の才を養成し、又特に外国語に重きを置き、海外貿易に従事するに適せしめんと欲す」。すなわち、学理とともに実務を重視する姿勢を鮮明にし、かつ国際経済の舞台上で活躍できる人材の育成をめざすことを教育方針の基礎としたのである。英語の一部とロシア語を除いて外国語の授業はすべて外国人教師によって行われ、発音とアクセントが正しくなければ通用しないことを叩き込むとともに、語学研修と経済事情の調査のために希望者を東アジアに派遣する夏期海外修学旅行が実施され、外国文化に直接接触れる絶好の機会が学生たちに与えられた。こうした世界に開かれた広い視野と実務を重んじる神戸高等商業学校の教育方針は、現在の神戸大学を生み出す土壌の一つとなっている。

(神戸大学附属図書館大学文書史料室長補佐 野呂理栄子)



神戸高等商業学校の正門(大正5年頃)



神戸高等商業学校の全景。当時学舎は現在の神戸市立葺合高等学校敷地にあった(明治43年頃)



神戸高等商業学校大講義室の授業風景。学生の頭上に教壇がある(昭和3年頃)



神戸大学創立110周年記念事業一覧 (11月10日以降開催分)

「世紀を超えて～神戸大学」(For 110 years and beyond)

神戸大学は1902(明治35)年の創立以来、本年で110周年を迎えました。これを記念し、「世紀を超えて～神戸大学」(For 110 years and beyond)をキャッチフレーズに、各種のシンポジウムや公開講座などを実施しています。最新の情報は神戸大学ホームページを参照下さい。

(<http://www.kobe-u.ac.jp/info/outline/110th/pdf/110th-eventlist.pdf?201209241804>)



平成24年9月19日現在

日 程	行 事 名	会 場	主 催 学 部 等	連 絡 先
11月10日(土)	神大-JAXA連携記念シンポジウム 「宇宙化学」の創造力－国際文化学から見た宇宙研究(仮)	神戸大学総合研究拠点 コンベンションホール	国際文化学 研究科総務係	078-803-7515
11月10日(土)～ 11日(日)	第33回神戸大学六甲祭・ 第39回神戸大学厳夜祭	神戸大学 六甲台地区等	学務部 学生支援課	【六甲祭】078-802-6597 rokkosai@kobe-u.com 【厳夜祭】未定
11月17日(土)～ 18日(日)	日本子育て学会第4回大会 http://www.geocities.jp/kosodategakakai2012/	神戸大学大学院人間発達 環境学研究所・発達科学部 (神戸大学鶴甲第2キャンパス)	人間発達環 境学研究所	078-803-7973
11月18日(日)	都市安全研究センター・オープンセンター	神戸ハーバーランド スペースシアター	都市安全 研究センター	078-803-6437
11月18日(日)	経営行動科学学会(JAAS)第15回年次大会 テーマ:グローバルな経営行動科学を目指して http://www.jaas.jp/	神戸大学 六甲台キャンパス	経営学研究科	078-803-6901
11月21日(水)、 22日(木)	東アジア海事科学国際学生シンポジウム(EAISS 2012) http://www.maritime.kobe-u.ac.jp/news/2012/20120517.html	神戸大学深江キャンパス 総合学術交流棟1F 梅木Yホールほか	海事科学研究科	078-431-6200
11月27日(火)	工学フォーラム2012	神戸市 産業振興センター	工学研究科(都市 安全研究センター・ 連携創造本部共催)	078-803-6332
12月6日(木)	第3回神戸大学ブリュッセルオフィスシンポジウム	ベルギー・ブリュッセル	EU総合 学術センター	078-803-5282
12月8日(土)	神戸大学附属幼稚園 ～文部科学省指定「研究開発学校」～研究発表会	神戸大学附属幼稚園	附属学校部	078-803-7910
12月20日(木)	情報基盤センターシンポジウム「情報基盤センターの役割と 新ICT戦略の展開－大学教育への活用のための取組事例－」	神戸大学百年記念館 (神大会館)	情報基盤センター	078-803-5081
12月25日(火)	若手フロンティア研究会2012	神戸大学百年記念館 (神大会館)	研究基盤センター	078-803-5398
平成24年12月～ 平成25年1月頃	平成24年度神戸大学地域連携活動発表会	未定	研究推進部 連携推進課 (地域連携推進室)	078-803-5427
平成25年 1月13日(金)	日本ディスクロージャー研究学会第6回研究大会	神戸大学 六甲台キャンパス	経営学研究科	078-803-6911
平成25年1月 18日(水)・19日(木)	平成24年度神戸大学附属小学校研究協議会	神戸大学附属小学校・ 附属明石小学校	神戸大学附属小学校・ 附属明石小学校	078-912-1642
平成25年1月18日(金) ～2月7日(木)	平成24年度資料展(オープンアカデミー巡回展)	アカデミア館 オープンアカデミー	附属図書館	078-382-5301
平成25年1月 30日(水)・31日(木)	第4回iBioK国際シンポジウム http://www.org.kobe-u.ac.jp/bioproduction/	神戸大学百年記念館 六甲ホール	自然科学系 先端融合研究環	078-912-6192
平成25年1月	都市安全研究センター 研究報告会(第6回災害対策セミナー in 神戸)	未定	都市安全 研究センター	078-803-6338
平成25年2月頃	神戸大学史特別展 「神戸大学110年の歩み」パネル展	神戸大学 東京六甲クラブ	附属図書館大学 文書史料室	078-803-5035
平成25年3月頃	神戸大学留学生センターコロキアム	未定	留学生課国際 教育交流グループ	078-803-5265
平成25年3月頃	グローバルリーダー養成システムの構想	神戸大学 六甲台キャンパス	経営学研究科	078-803-6901



<http://www.kobe-u.ac.jp>